

こんにちは！ 室長の工藤です。

青森にやってきて20年近くなるのですが、いまだにちゃんと覚えていないのが地名です。とくに市内中心部、すなわち藩政時代の青森町という範囲では、当時の地名であれば場所もおおむね分かるのですが、現在の地名で言われるとピンとこない…そんなことはしょっちゅうです。

さて、現在の青柳2丁目の一部はかつて「塩町」という地名であったのはご存知でしょうか。藩政時代に青森の町づくりが進むなか、この地区では塩の専売を認められたことが地名の由来になっています。ところが、塩町の塩の取引状況などを明らかにする史料はほとんど皆無に近く、その名どおりの「塩町」の実体はほとんど分かりません。



旧町名「塩町」の標柱

むしろ、花街＝「遊女町」としての塩町の方が有名で、藩政時代のさまざまな記録、例えばこのメールマガジンでもかつて取り上げた、津軽版弥次喜多道中記とでもいうべき『御国巡覧おくにじゅんらん滑稽嘘儘戯』にも記述があり、写真も古いところでは明治9年（1876）の塩町の遊郭の写真が今に伝わっています。



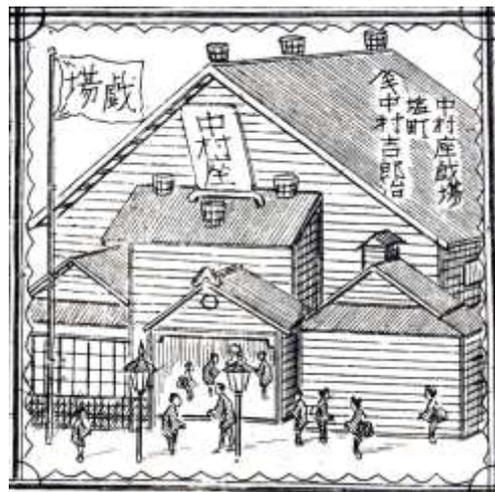
塩町の遊郭

（明治9年撮影、『目で見える青森の歴史』より）

ではなぜ塩町は、塩の専売を行う町から遊女町へと姿を変えたのでしょうか。当時の史料がなく詳細までは分かりませんが、どうやら塩町から「塩の専売」という特権がなくなったことが背景にあるようです。塩町が誕生してわずか20年ほどで専売制は崩れ、塩の生産者による塩の売買が認められました。加えて、元禄8年(1695)の大飢饉以降、津軽領内の不作状況とあいまってでしょうか、米町の米問屋(と思われる)たちが中心になり、平内領に進出して塩の生産を行っているのです。

つまり、大きな資金力と米の取引で販売力がある米問屋たちが、塩の生産と販売を一手に担うようになったのです。一方、塩町では元禄飢饉の影響でしょうか、人口が急激に減っています(戸数でいうと40%減)。こうして専売制の崩壊と人々の困窮が塩町を衰退に導き、その結果塩町は「花街」として生まれ変わるのです。時期としては、17世紀の末期とする見解が多いようですが、現時点で確認できた史料からは早くても18世紀初頭、18世紀中頃が妥当なところではないかと思われています。

ただ、花街となった塩町も、幕末から明治の初年にかけて再び衰退します。といってもこの時は塩町のみならず青森町全体が退潮傾向にあったのです。そこで、塩町の賑わいを取り戻すべく、当時寺町にあった芝居小屋を移転させることになりました。これをきっかけに、塩町には青森座・中村座といった劇場ができ、その後寺山修司にもゆかりのある歌舞伎座ができるなど、青森の芸能文化を担う町へと変貌をとげたのです。



中村座
(『青森市史』第5巻付図
「青森実地明細絵図」より)